
THE TEAM! (番外編) ~ 白真の告白 ~

緒例

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

THE TEAM！（番外編） ～白真の告白～

【コード】

N7492D

【作者名】

緒俐

【あらすじ】

「紫織はいつから白真と付き合ってる？」との疑問から事件は巻き起こる。そして、白真のファンクラブから紫織に魔の手が伸びていて……

「箒星学院高等部昼休み、

またまた「カレカノいない同盟」の一言から事件は始まる……

「ねえ、しーちゃん」

「何？」

ポツキーをかじりながら、尋ねられた方向を紫織は向いた。

「色鳥君と付き合い始めたのっていつ？」

「白と？ うーん、確か中一だったかしら」

紫織は古い記憶をたどっていく。

告白の言葉は印象的だったが、

時期はそこまで覚えてない。

なんせ、生まれたときから一緒にいたので、

自然に恋人になっていたというほうが正しいのだ。

「だけど急にどうしたの？」

もつともな疑問に、クラスメイトは溜息をついた。

「それがね、色鳥君のファンクラブがあるでしょう？」

「どうもしーちゃんのこと調べてるみたいなのよ。」

「翡翠ちゃんみたいに呼び出しとかかからないといけれど……」

「心配しなくてもいいだろう？ 紫織は空手三段だぜ？」

「快が話しに割ってる。」

今日の休憩時間は修と将棋。
お互いに一步も引かないあたり、
この勝負は夜まで持ち越されそうだ。

「だけど、もしもってことがあるでしょう？
そのときどうするつもり？」

鋭い指摘だが、快は平然として答えた。

「修、少し待った。だから心配要らないって。
どうせお前らが動くし、俺達もいる。」

何より白のやつが俺たちより早く片付けるぞ」

危機感などない。

なんせ、長年の付き合いで白真がどれだけ紫織のことを思っているか、

想像しただけでも怖い。そう、怖いのだ……

「まったく、TEAMは危機感の欠片もないのかしら……」

そして放課後……

「やあっ！」

道場には紫織の声がこだます。

先輩相手にも何のその、快勝だ。

「さすが美原だな」

「ああ、美人だし、才女だし、しかも空手二段！」

白の奴が羨ましいぜ」

隣で練習している合気道部の男子からは、
憧れのマドンナ的な言葉が漏れる。

「けどよ、最近白のファンクラブが怪しい動きをしてるらしいぜ」
「それ本当!」

翡翠がひょっこり現れた。彼女は合気道部である。

「本当だったら教えて!」
紫織のピンチは私のピンチなの!」

親友思いの彼女は食い下がる。

「それがさ、あいつら美原を待ち伏せしてやっちまおつて」とら
しいぜ。

しかもバスターまで雇ったって噂だよ」

それを聞いたとたん、翡翠はすぐに飛び出した。
バスターが相手となれば、さすがの紫織も手加減できなくなる。
その前に自分が片付けてしまおうしかない!

「美原紫織か?」

声をかけられた方向にはバスターと思われる男達と、
ファンクラブの女子たち。

「違うわよ、けどその子も邪魔なの。やって頂戴」

「翡翠！！ダメでしょ！！ 治療兵がこんな奴ら相手にして、もし怪我でもしたらどうするの！！」
「だって、紫織がピンチだっていうから！」

涙目になって翡翠が言うと、

「大丈夫よ。「TEAM」に手を出したこと以前に、翡翠に手を出したこいつらに思い知らせてやらなくちゃね……」
「！」

そのときの形相に、翡翠以外のものが悪寒を感じた。

「当分、私達に手出しできないようにしといてあげなくちゃね！」

そして紫織の周りに無数のナイフが出現する。

「ちょっと待てよ……！！」

この女まさか「アートの女王」か！！

「間違いねえ！！ 最悪だ！！」

「アートの女王」。それは紫織の掃除屋界での通り名だ。

とある空間に仕舞いこんであるさまざまな武器を、自分が取り出したときに取り出して戦う換装士。

特に紫織は趣向を凝らした戦いをするので、その名がつけられたのである。

「その通り。タイトル「死の彫刻」！！」

「ぎゃああああ！！！！」

そして帰り道……

「まったく……随分ひどいことやったな」

「ごめんごめん、ついね」

快の苦勞を一つ増やしたことに對して、

紫織は軽く謝った。

「だが、翡翠も無茶すんなよ。」

お前は大事な治療兵なんだからよ」

「ごめんなさい」

傍から見れば間違いなく告白にも取れないこの言動。

しかし、翡翠がそれに気づくわけもない。

「それと、紫織に一つだけいっておきたいことがある」

「何？」

「白とお前が付き合い始めたのは中一の五月十三だ。」

白の奴に昼間の会話言ったら嘆いてたぞ」

おそらく泣きついたら違いない。

快の制服がなんとなく詩話になっている気がする。

「そつか……だけどね、

日にち以上にあいつの告白の言葉のほうが印象的だったのよ」

「何って言ったの？」

わくわくしながら翡翠はその言葉を待つ。

快もそれは聞いてないのか耳を傾けた。

「あいつね……」

「はくしゅー!!」

「何だ？ 風邪か？」

剣道の防具を脱ぎながら修が尋ねる。

「いや、紫織が俺のことを惚気てるだけだ」

「さいですか」

悪友の惚気などさらさら修は興味ない。

「だけど、翡翠が今日も紫織と間違えられて絡まれたみたいだからさ、

ファンクラブの雇った掃除屋をつぶしにいかねえとな」

怒ってる！ 穏やかに言ってもキレてる！

修は今宵も快の苦勞が増えそうだと溜息をつく。

「だからさ、紫織に伝言頼むよ。」

『告白の日は忘れても、俺の誕生日だけは覚えてろ！』って」

白真の誕生日は五月十三日だった……

THE TEAM! (番外編) ~白真の告白~

(後書き)

今回は紫織ちゃんの話を書いてみました！
ただし、恋愛というより友情の話ですね・・・

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7492d/>

THE TEAM! (番外編) ~白真の告白~

2009年7月1日21時18分発行